

支えられて

高野 味鈴

ヤナセクリニック(三重県津市)

私は15年間助産師として勤務していた総合病院を8年前退職し、現在は産科婦人科の有床診療所に勤務している。自分の時間がもてるのは1日のうちでも限られ、家庭と仕事の両立に限界を感じながらも、多くの人に支えられて仕事を続けている。

愛猫チョマの出産

私が3歳の時、父は胃がんで他界した。父の思い出といえば、寝顔とお葬式しかない。その翌年、伊勢湾台風で我が家は全壊した。母は私と2歳上の姉をかかえ、経済的にも精神的にも苦悩の日々だっただろうと思う。しかし、子どもの前では一言も弱音を吐かず、母は私たち2人を温かく育ててくれた。

私は、少し弱虫でよく泣く子どもだった。そんな私の友達に猫のチョマ。物心がついた時から一緒に、私の寂しさを癒してくれていたのだろう。眠る時も必ず傍らにいてくれた。

チョマは毎年たくさんの子猫を出産した。お腹が大きくなって2~3日姿が見えなくなると、いつの間にか子猫をぞろぞろと連れて家に帰ってきた。そんなチョマも年老いてくると出産が不安になったのか、ミーミーと鳴いては私にまわりつき、離れなくなった。

ある晩、チョマは私の布団のなかで数匹の子猫を産んだ。幼い私には出産のことはよく分からなかったが、とても嬉しかったことを今も覚えている。卵膜に被われたまま娩出したのか、自分で破膜したのか定かでないが、チョマは臍帯を自分の

歯で切断し、羊水を拭うように子猫をなめ続けた。猫は綺麗好きといわれるが、事実、分娩後は羊水や血液、付属物など何も残っていなかった。まだ目の開いていない子猫でもお乳の匂いをかぎつけて上手にお乳を飲む。親猫はうまく飲めない子猫がいると連れてきてはお乳を飲ませていた。その頃、助産師になろうと思っていたわけではないが、幼いながらに母性本能や子どもを産む本能、そして自然の偉大さを知り、生まれてくる感動を覚えたことは今も鮮明に残っている。

助産の道へ

定職をもたず苦勞した母は、私たち姉妹に「女はどんなことがあっても、自分で子どもを育てていく力をもっていなければならない!」と口癖のように言っていた。中学卒業と同時に自立することを決め、私は看護師になる道を選んだ。看護学生の時、生活費の足しにと選んだバイト先の病院が産婦人科だった。そこで出会った出産時のあの緊張感と産まれた瞬間の感動と喜びは、私のなかでいつの間にか助産師への憧れに変わっていった。回り道をしながら助産師の資格を得た時、私は25歳になっていた。

助産婦学校を卒業して初めての就職先は総合病院の産科婦人科(途中からNICUを併設)。卒業してすぐ、私が分娩介助した産婦さんに口唇口蓋裂の児が生まれた。当時は超音波診断などはまだなく、事前の情報も経験もなかった私は児頭娩出の時、思わず「あっ」と声をあげた。それからもう手が震えてしまい、会陰保護などまったくでき



loshilco.e

ない状況になってしまった。もちろん、後で先輩や医師から厳重なお叱りを受けたのだが、この一件から、私はつねに異常を予測して分娩中に何が起きても動揺しないことを肝に銘じた。

「育児」という視点

助産師になって5年目に結婚。翌年、長女を出産し、その2年後に長男を出産した。2人とも41週の予定日超過妊娠で、点滴による誘発分娩。2人目の時はメトロ挿入まで体験し、理想の自然分娩とはほど遠いお産であった。しかし、出産したのが勤務先の病院であったため、母子同室の願いを叶えてもらい、母乳育児は継続した。産後1年は休暇をとってゆっくりと育児を楽しもうと考えていたが、実際は楽しむどころか毎日が赤ん坊との対決の日々。小さな赤ん坊に振り回され、ボロボロに崩れていく自分に愕然とした。夫は「この子、何で泣いてるの」と私にたずねる。正直、それを聞きたいのは私の方だった。

病院にいた頃は、分娩が終わり母子が退院してしまうと、それから母親と関わることは少なくなってしまう、育児がどうなっているかなど考えたこともなかった。これは我が子から教わった大切な気づきだったと思う。

転機

出産後は仕事に戻り、育児と3交替の勤務を無我夢中で続けたが、育児に少し余裕が出てきた頃、私は総合病院を退職した。退職後数年は家庭サービスと称し、家族とよく遊んだ。そして、今

まで時間がとれなかった研修会や学会などにも参加し、自分の進むべき方向を模索した。この時期が私たち家族にとって一番充実し、ゆっくりと流れた時間だったと思う。唯一、母親らしい私だったかもしれない。

充電期間を経て、私は現在の仕事に就いた。自分の体験から出産だけではなく育児までケアができる組織をつくること。出産は可能な限り自然分娩で。産婦中心の医療を。病院ではできそうで難しい理想を掲げて再出発を果たしたものの、当初はスタッフが足りず、お産があると家には帰れなかった。アクシデントも頻発し、一度仕事に出ると次はいつ家に戻ってくるかわからない。そんな状況に家族からは批判の声もあがり、あれほど「女としての自立」を言っていた母まで私の生活を嘆いた。

仕事と家庭の間で葛藤の日々を送っていたある日、「子どものために仕事を辞めるのはやめて！お母さんの問題やから」と娘が言ってくれた。この一言に私は救われた。子どもにとっては、精一杯の言葉だったに違いない。それから、仕事を続ける代わりに、子どもに恥ずかしくない仕事をするのが、私の責務だと考えるようにしている。

今、勤務先の先生やスタッフの理解と協力を得ながら、少しずつ夢が実現しつつある。とりあえずいまのところ家族も平静……。母や夫にも支えられ仕事を続けている。感謝！

今回はこの秋に三重県鈴鹿市で助産所を開業された鈴木照美さんにバトンを渡します。

(たかの・みすず)